

# 「自由で開かれたインド太平洋戦略」の中のシーレーン防衛

2018年8月27日

海洋安全保障シンポジウム

笹川平和財団海洋政策研究所

特別研究員 秋元一峰

「二つの海の交わり」  
Confluence of the Two Seas  
(安倍首相、2007年インド議会)

Swami Vivekananda, *“The different streams, having their sources in different places, all mingle their water in the sea”*.

*“My friends, where exactly do we now stand historically and geographically? To answer this question, I would like to quote here the title of a book authored by the Mughal prince Dara Shikoh in 1655. We are now at a point at which the Confluence of the Two Seas is coming into being.” “the Pacific and Indian Oceans are now bringing about a dynamic coupling as seas of freedom and of prosperity. Japanese diplomacy is now promoting various concepts in a host of different areas so that a region called the Arc of Freedom and Prosperity will be formed along the outer rim of the Eurasian continent.”*

# インド太平洋圏の安全保障観

フェルナン・ブローデル『地中海』

歴史軸＝「持続状態」＋「変動局面」＋「事件」

に照らして冷戦期までを史観すれば、

## インド洋世界のパラダイム史観

“コスモポリタンの海洋世界”



“国家がチャレンジする海洋世界”



“シーパワーが競う海洋世界”



“軍事的対立の海洋世界”

## 太平洋世界のパラダイム史観

“国家がチャレンジする海洋世界”



“シーパワーが競う海洋世界”



“軍事的対立の海洋世界”



## インド太平洋の安全保障環境（歴史に顧みて今）

「一帯一路構想」がもたらす「変動局面」の予感

### インド洋世界

冷戦後のグローバル経済活動の舞台＝“コスモポリタンの海洋世界”



「一帯一路構想」＝“国家がチャレンジする海洋世界”

＋

「自由で開かれたインド太平洋戦略」



“シーパワーが競う海洋世界”

## 太平洋世界

「自由で開かれたインド太平洋戦略」対「一帯一路構想」  
＝ “シーパワーが競う海洋世界”

### 地中海世界との類似性

サラミスの海戦： “海洋国家ギリシャ” 対 “大陸国家ペルシャ”

↓  
ポエニ戦争： “海洋国家ローマ” 対 “海洋国家カルタゴ”

↓  
ローマ1強の時代

↓  
レパントの海戦： “利益連合体” 対 “台頭大陸国家オスマン帝国”

これからの太平洋世界＝？

## 「一帯一路構想」による安全保障環境への影響

- 中国が海洋進出において見せる3つの顔  
東シナ海・南シナ海＝覇権的な顔  
インド洋＝協調的な顔  
太平洋＝パワーバランスを図る顔
- 「債務の罠」・・・スリランカ、マレーシア、モルディブ、パキスタン
- 「一帯一路構想」の負の側面による影響  
・・・バヌアツ、ミクロネシア島嶼国への影響の警戒



「自由で開かれたインド太平洋戦略」への結束

# 「自由で開かれたインド太平洋戦略」 3層戦略の提唱

第1層＝「一帯一路構想」と「自由で開かれたインド太平洋戦略」を共存させるための  
“コンサート戦略”

第2層＝覇権的な顔への変貌を阻止するための  
“4 + 4 + 5 シンクロナイズ戦略”

第3層＝グレーゾーン事態において海上物流を確保するための  
“選択的シーレーン防衛戦略”

## “コンサート戦略” (Concert Strategy)

- 「一帯一路構想」に基づく事業に「自由で開かれたインド太平洋戦略」に同調する諸国による健全な投資と信頼性ある技術を調和させる。
- 中国の持つマーケット力と日本など技術先進国の持つ力を、普遍性ある国際経済活動のルールに沿って同じインフラ整備の舞台に上げ、健全で“債務の罠”に陥ることのない投資を促し、質の高い技術を提供する。
- それにより、経済競争を紛争に至らせず、地域諸国の政情を不安定化させることなく、また1国だけの介入によるパワーバランスの流動化を防ぐ。

“4 + 4 + 5 シンクロナイズ戦略”  
(4+4+5 Synchronized Strategy)

オーストラリア・インド・日本・アメリカのQUAD

+

オーストラリア・フランス・ニュージーランド・アメリカの  
QUAD

+

イギリス・オーストラリア・ニュージーランド・シンガポール・  
マレーシアの5か国防衛取極 (FPDA)

## “選択的シーレーン防衛戦略” (Discretionary Sea Lane Defense Strategy)

- 海洋利用を巡る国家間の対立が激化する状況において、  
“Freedom of Navigation “を巡る紛争が武力紛争にエスカレートする  
事態を回避する戦略
- 海洋利用を巡る武力紛争を抑止し得る戦略

事例：“二つの海の交わり”の要衝海域である南シナ海における  
グレーゾーン事態を想定してのシーレーン防衛戦略

# 想定事例

- a. 南シナ海において、中国が他国の漁船や各種調査船を排除する動きを強め、中国と他の当事国の海上法執行機関に属する船舶等との間で異常接近や衝突が頻繁に生じる事態となった。
- b. アメリカは、武力衝突にエスカレートする事態を抑制するため、空母を含む艦隊を南西諸島に沿った西太平洋とフィリピンの群島水域に展開した。これに対し、中国は、南シナ海における自国の権益と環境の保護を名目として、“第1列島線”の内側海域を“Area Denial”海域として他国船舶の航行を制限すると宣言し、特に、被弾した場合に環境に甚大な被害を及ぼす大型原油タンカー（VLCC）は、南シナ海を迂回するよう警告した。
- c. すべての海運会社が、南シナ海を通航するVLCCについて安全策を講じることを余儀なくされた。中国は、南シナ海を通る自国向けの原油タンカーについては、自国海軍艦艇によって護衛して通航させる一方、「9段線」の内側海域には中国の主権が及ぶとして、他国の海軍艦艇の航行は無害通航と認めないとの立場を示した。

日本は、自国に原油を運ぶVLCCを海上自衛隊の艦船等によって護衛することに慎重な姿勢を見せたため、日本向けのVLCCは、事態が終息する、或いは対応措置が採られるまでの間、南シナ海を避けて航行せざるを得ない事態となった。
- d. 中東から日本に原油を運搬するVLCCは、通常ルートであるマラッカ・シンガポール海峡を通れば、必然的に南シナ海に入ることになるため、迂回する代替ルートを選定せざるを得なくなった。
- e. 中国は更に、南シナ海の問題は地域の当事国間で解決すべきものであると主張してアメリカを牽制し、域外の国の武装艦船・航空機が南シナ海に入れば、第1列島線と第2列島線の間を“Anti-access”海域として所要の措置を講じると宣言した。

南西諸島からフィリピン群島に沿った西太平洋は、中国の“Anti-access”海域に当たる第2列島線の内側になる。VLCCがマラッカ・シンガポール海峡を避けてインドネシアの群島水域に入り、その後西太平洋を北上すれば、そこは中国の“Anti-access”海域である。アメリカと中国の間で緊張状態が高まれば、“Anti-access”海域へのVLCCの航行にも支障を来す場合が危惧された。

# 想定シナリオ

- a. 南シナ海で中国と他国の海上法執行機関に属する船舶等との間で異常接近や衝突が頻発。
- b. アメリカが艦隊を南西諸島に沿った西太平洋とフィリピンの群島水域に展開。  
中国は“第1列島線”の内側海域を“Area Denial”海域として他国船舶の航行制限を宣言、被弾した場合に環境に甚大な被害を及ぼす大型原油タンカー（VLCC）は南シナ海を迂回するよう警告。
- c. 中国は南シナ海を通る自国向け原油タンカーを自国海軍艦艇によって護衛。「9段線」の内側海域には中国の主権が及び他国海軍艦艇の航行は無害通航と認めないとの立場。  
日本向けのVLCCは、事態が終息する或いは対応措置が採られるまでの間、南シナ海を避けて航行せざるを得ない事態。
- d. 中東から日本に原油を運搬するすべてのVLCCは航行すれば必然的に南シナ海に入るマラッカ・シンガポール海峡を迂回する代替ルートを選定。
- e. 中国は更に、域外国の武装艦船・航空機が南シナ海に入れば第1列島線と第2列島線の間海域を“Anti-access”海域として所要の措置を講じると宣言。  
VLCCがマラッカ・シンガポール海峡を避けてインドネシアの群島水域に入り西太平洋を北上すれば“Anti-access”海域。  
アメリカと中国の間で緊張状態が高まれば、“Anti-access”海域へのVLCCの航行にも支障を来たす事態が危惧。

## 日本向けVLCCの対応と経済的損失

選択できるルート

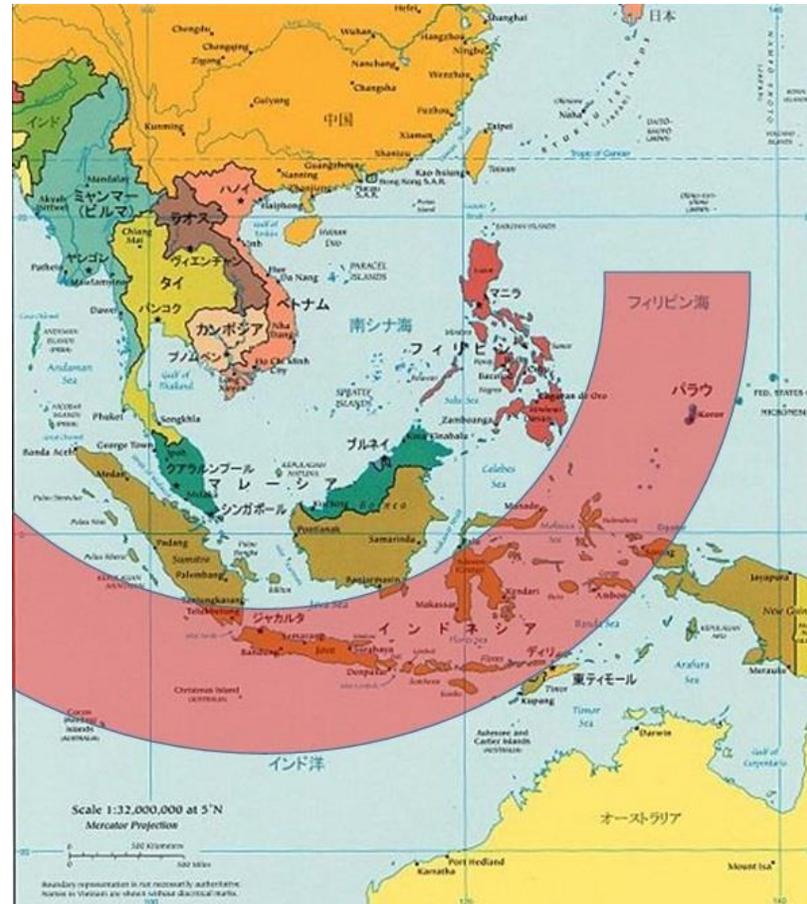
- ① 第1列島線の中国側は危険だが第2列島線と第1列島線の間は通航できる  
場合：マラッカ・シンガポール海峡を避けてインドネシア群島水域の  
ロンボク海峡に向かい、マカッサル海峡を通過して西太平洋に出て日本に  
向け北上するルート。＝経済的損失は許容範囲。
- ② 第2列島線と第1列島線の間海域も危険な状態となった  
場合：インド洋からオーストラリア南岸を通過して西太平洋に出て、  
第2列島線の以東を日本に向け北上するルート。＝多大な経済的損失

## 選択し得る代替ルート

南シナ海の航行が危険な場合における代替ルート＝南シナ海迂回ルート

インドネシア群島水域を通り第1列島線と第2列島線の間を北上するルート  
＝ （“外縁ルート” Outer Rim Route）

# 第1-2列島線間のシーレーン “外縁ルート” (Outer Rim Route) の安全性確保の重要性



# “選択的シーレーン防衛戦略”としての “外縁ルート”のコントロール

“外縁ルート”のシーコントロールの対象海域

- ベンガル湾（アンダマン海）
- メラネシア海域
- ミクロネシア海域

## “外縁ルート” インド洋側の確保

- スリランカとの良好な関係の構築
  - 能力構築支援
  - 共同訓練による連携の強化
  - コンサート戦略の発揮
- オーストラリア・インド・日本・アメリカの4か国枠組みによる協調的な外交・安全保障政策

## “外縁ルート” 太平洋側の確保

- メラネシア海域
  - － 5か国防衛協定とのシナジー効果の発揮
- ミクロネシア北部海域
  - － 日米同盟の強化
- ミクロネシア南部海域
  - － ミクロネシア島嶼国との良好な関係の構築
  - － アメリカとミクロネシア諸国との自由連合盟約の延長
  - － オーストラリア・フランス・ニュージーランド・アメリカの**QUAD**
  - とのシナジー効果の発揮
  - － 台湾との連携

## “選択的シーレーン防衛構想” と Offshore Control との相違

“Offshore Control” :

- ・ 長期に亘る作戦となり世界経済に及ぼす影響大。
  - ・ 中国経済が麻痺する事態が生じれば、インド洋東部—マラッカ海峡—南シナ海に至る海域のシーコントロールを巡る武力紛争の公算大。
- = “Offshore Control” の発動は、国際経済を不安定化させ、軍事的緊張を高めるなど、むしろ受け入れ難い事態を生じさせる。

“選択的シーレーン防衛構想” :

- ・ 平時から “選択的シーレーン防衛戦略” としてインド太平洋の代替架け橋となる “外縁ルート” のコントロール能力を維持することにより、グレーゾーン事態を武力紛争事態にエスカレートさせない抑止戦略となる。

# Map: Indian Ocean

